The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	宋代文人の生活と詩ー蘇軾を中心としてー
Author(s)	趙, 蕊蕊
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/70709
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　趙　蕊蕊　）	
論文題名	宋代文人の生活と詩 ―蘇軾を中心として―

論文内容の要旨

本論文は、中国宋代の詩文学について、文人たちの「生活」との関連を中心に考察を加えたものである。「生活」と一口に言ってもそれは多様である。本論文に言う「生活」には、文人たちの私的な日常生活のみならず、公的な社会生活も含まれる。主たる対象として取りあげる文人は北宋の蘇軾であるが、必要に応じて北宋の欧陽脩・梅堯臣・黄庭堅、南宋の陸游・楊万里、更には六朝・唐代の文人も取りあげられる。全体は大きく第一部「蘇詩と挫折、蘇詩と政治」、第二部「詩歌と美人、詩歌と美食」の二部に分かれ、第一部は五章、第二部は三章と附論一章からなり、400字詰め原稿用紙換算で約540頁の論文である。

宋代の文人は、ほぼ例外なく科挙を通過した官僚である。第一部「蘇詩と政治、蘇詩と挫折」は、北宋の蘇軾の詩について、その官僚としての「生活」と関連づけながら考察を加える。官僚としての生活について考える際、政治的な背景を無視することはできない。実際、蘇軾の官僚生活は弾劾・左遷の連続であった。第一部では、かかる官僚生活が蘇軾の詩にどのように表現されたかを論じる。

第一部の第一章「黄州時代の蘇軾における悲哀表現―「詩成却超然、老涙不成滴」を手がかりに―」は、弾劾を受け左遷されていた黄州時代の蘇軾の詩に示される心情について考察する。蘇軾の詩に表現された「涙」の分析を通して、そこに挫折に伴う「悲」とそれを「超然」として乗りこえる「楽」とが複雑に絡み合う形で表現されていたことを明らかにする。

第二章「蘇軾の楽園と『自娯』」は、失意の人生にあって蘇軾が追い求めた「楽園」イメージとその特質について考察する。ここでは特に「仇池（石）」を詠じた蘇軾の詩を取りあげ、そこに表現された帰隠への志向を陶淵明や白居易と比較しながら分析を加える。それによって、蘇軾の「楽園」が現実の生活のなかに見出される内在的・精神的な存在であったこと、そこには官僚生活における現実との対抗のなかで練りあげられていった積極的・主体的な「自娯（現実のなかに快楽を見出すこと）」の精神があらわれていることなどを明らかにする。

第三章「蘇軾の『卜居』詩について」では、中央と地方を転々とする官僚生活を送った蘇軾の「卜居（隠居地を定めること）」すなわち一種の帰隠志向と官僚生活との関連について、時系列に沿う形で詳細な考察を加える。それによって、蘇軾の「卜居」が挫折の官僚生活のなかで政治的な軋轢を回避するための手段という性格を有していたこと、また故郷に帰れぬ「無家」の存在であるという客寓意識と結びついていたことなどを明らかにする。そのうえで後年、嶺南へと左遷された時期の「卜居」について、現実の場所を超えた精神世界のなかに自らの帰り行くべき場所を求めるようになること、言い換えるならば官僚としての挫折や故郷を離れた客寓意識を超克する境地へと到達していたことを指摘する。

第四章「蘇軾詩の『微物』描写における自我像」では、蘇軾の詩における「微物（動物などの取るに足らぬ存在）」の描写を取りあげ、それらに託された蘇軾の自己認識について杜甫との比較も交えながら分析を加える。それによって、蘇軾の詩に表現された「微物」は強靭な精神力を備えた存在として表現されていること、そこには官僚生活の挫折を乗りこえてゆく蘇軾の姿が投影されていることを明らかにする。そのうえで「微物」は蘇軾の自己認識にとって重要な素材であり、官僚士大夫の「内在的な精神」の追求という点において画期的な意味を有することを指摘する。

第五章「嶺南時期における蘇軾の『勧農』詩」は、嶺南左遷期における蘇軾の「勧農（農業振興）」活動について考察を加える。「勧農」は、官僚たる者の重要な責務の一つであり、嶺南期の蘇軾もまたそれを自らに課していた。ここでは、蘇軾の詩の分析を通して、嶺南の困窮地域において蘇軾が民の生活向上のために積極的に取り組んだ「勧農」活動とそこにあらわれた蘇軾の心情・人生観の諸相を明らかにする。また、中国の文人のなかで「勧農」を主題として詠じた最初期の文人陶淵明との比較を通して、蘇軾の「勧農」の特質を分析する。それによって、官僚の権限を剥奪されていた嶺南期の蘇軾にとっては「躬耕（自ら農作業に従事すること）」が「勧農」の代替行為として認識されていたこと、嶺南地域が「江湖」と故郷のイメージを兼ね備えた安寧の地として認識されていたことを指摘する。

第一部は、蘇軾を主たる対象に据えて、公的な官僚生活との関連からその詩を論じたものである。言うまでもなく、彼らの生活は官僚としての公的な生活に限られるものではない。第二部は、より私的な性格の強い日常生活・趣味生活との関連から、対象を蘇軾以外の文人に拡大して、彼らの文学（詩歌）批評、特に「美人」と「食」の比喩を用いた批評を論じる。

第二部の第一章「宋代の文学批評における『美人の比喩』」は、唐および宋代における「美人（美女）」のイメージを比喩として用いた文学批評を取りあげる。当初は書法（書道）作品の批評に用いられた「美人」のイメージは、唐宋期においては詩歌などの文学作品にも用いられるようになる。それらの多くは、文学作品から受ける見た目の美しさの印象を「美女」に喩えるものであるが、この種の批評方法の深まりとともに、単に視覚的な見た目ではなく、その精神性・道徳性にも着目した形で行われるようになってゆく。本章では、具体的な批評事例の詳細な分析を通して、こうした批評方法の進展が、宋代における「文質」論や「平淡」「自然」「天真」などの諸概念をめぐる議論と密接に結びついていたことを明らかにする。

第二章「文人の食生活と文学批評―中唐から宋代へ―」は、次章とともに「以食喩詩」、すなわち人の日常生活を構成する最も重要な要素である「食（飲食、食物）」のイメージを比喩として用いた文学批評を論じる。中国では古く「味」を用いた文学批評（いわゆる「詩味」説）が行われていたが、それがより具体的な食物・摂食行為と結びつく形で「以食喩詩」の批評方法が生み出されてくる。ここでは中唐期から宋代に至るこの種の批評方法の深化のプロセスを、多くの文人を広く取りあげ、彼らの食生活・食文化と関連づけながら明らかにする。

第三章「宋代における『以食喩詩』について―蘇軾を中心に―」は前章を踏まえ、主に北宋の蘇軾とその周辺の文人を取りあげて、宋代における「以食喩詩」の諸相について考察する。それによって、飲食に深い造詣があった蘇軾が、この批評の従来の枠組みを越えて、食材や調理方法にまで及ぶ多様な比喩を活用する形で文学作品を批評していったことを明らかにする。また、あわせて宋代文人の「以食喩詩」の背景には、親しい文人同士の座談の場での諧謔的な批評のやり取りがあったこと、またそこには「雅俗の融合」、大きく言えば世俗的な庶民文化の成熟とも呼ぶべき現象が見られるようになっていたことを指摘する。

最後に附された附論「柏木如亭と中国の詩学―『詩本草』を中心に―」は前二章を踏まえ、「以食喩詩」の日本における受容について考察する。それによって、柏木如亭が飲食に深い関心と造詣を有していたことを明らかにするとともに、「詩病」「以俗為雅」「以食喩詩」の三点から『詩本草』における中国詩学の受容の一端を明らかにする。

以上を要するに、本論文の主眼は、官僚生活との関連から蘇軾における「内在的な精神」の追求を明らかにすること（第一部）、日常的な趣味生活との関連から蘇軾をはじめとする宋代文人における美意識の世俗化・日常化を明らかにすること（第二部）にある。

第一章と第二章は、挫折の人生における、蘇軾の複雑な心情表現を考察する。それに續いて、政治環境における蘇軾の住居狀況や自己認識を論じる。

第三章「蘇軾の『卜居』詩について」では、中央と地方の間を轉々と移動する官僚生活を送った蘇軾の「卜居」をめぐって、時系列に沿って彼の人生經歷と關連づけながら詳しく檢討する。この考察によって、蘇軾が選擇した卜居の地と、彼自身の生活體驗、政治的な立場、血緣、地緣などの要素が複雜に絡み合っていることを明らかにする。第四章「蘇軾詩の『微物』描寫における自我像」では、蘇軾が詠じた「微物」描寫を對象に、それらに託された自我像を分析する。官僚生活における度重なる左遷は、蘇軾の精神を大いに苦しめたが、彼の描寫する「微物」は意氣消沈する姿を超えて、強靭な精神力を強調するに至っている。「微物」は蘇軾の自己認識における重要な素材であり、宋代文學の「精細化」を現わすだけでなく、その時代の文人たちの自己認識の深刻さも反映している。第五章「嶺南時期における蘇軾の『勸農』詩」は、嶺南時期における蘇軾の「勸農」活動を端緒として、彼の創作意圖や唱和作に現れた自己認識について檢討する。この論考によって、蘇軾が詠った嶺南の世界は、經濟的に言えば落伍していたにもかかわらず、實は「江湖」と故郷のイメージを兼ね備えた土地であったことを明らかにしたい。彼が嶺南を故郷と見なしたのは、政治の風波が及ばない、「心を安らかにする」地であったからであろう。

以上、社會矛盾や黨爭が激しくなる時期に焦点を絞って、黨爭の渦に巻き込まれた蘇軾の左遷や不遇という歷史的背景を踏まえながら、彼の詩における政治の緊張感とそれを解消せんとする生活に即した詩歌表現について論じる。これらの論考は、詩の題材や内容面から言えば、交遊・住居・飲食・物の收藏・農事などに言及したものである。

一方で、宋代の文人たちは、日常生活における多樣な場面や體驗を活用し、それを詩歌批評に引き入れ、彼らの美意識を表している。中國の詩歌批評史において、意象（イメージ）批評は極めて重要な位置を占めてきた。第二部「詩歌と美人、詩歌と美食」では、美人と美食二つの意象を取り上げ、視覺と味覺の角度から宋代文人の詩論や美意識について、三章に分けて考察する。

第一章「宋代の文學批評における『美人の比喩』」では、見目好い女性すなわち「美人」という意象を取り上げ、宋代の文學批評における「美人の比喩」の諸相を檢討し、「美人」というイメージの特徵やそこに表われた文人の創作意識や美意識について論じる。文人たちは詩を讀んで、美人が目前に立ち現われるかのようだ、と言っている。このような「美人の比喩」は、「詩を目で味わう」といっても過言ではないだろう。

第二章と第三章は、人間の日常生活を構成する最も重要かつ卑近な要素である飲食に着目し、宋代の詩文に表われる食生活や美意識をめぐる問題について考察する。

第二章「文人の食生活と文學批評——中唐から宋代へ」では、中唐以降における「味」をめぐる議論の深化に即し、美食の比喩を手がかりとして、文人の食生活と「以食喩詩」の關連を考察する。中唐から宋代の文人たちは日常的な飲食經驗によりながら、彼らの飲食嗜好や習慣、及び當時の氣風と結びつけ、様々な角度から文學批評を展開した。この部分の論述は、次の第二章の前提をなすものである。第二章「宋代における『以食喩詩』」は、主に北宋の蘇軾とその周邊の文人の例を中心に取りあげて、宋代の「以食喩詩」の諸相について考察する。飲食に深い造詣があった蘇軾は、この批評の從來の枠組みを越え、食材や調理方法に及ぶ形で文學を批評し、「以食喩詩」を成熟させてゆく。最後に「柏木如亭と中國の詩學——『詩本草』を中心に」を、「以食喩詩」の日本における受容についての考察として附す。

總じて言えば、宋代は、ほかの時代と比べて軍事・外交方面はかんばしくなかったが、文學・藝術・經濟など各々の領域に大きな發展と深化がある時代であった。文學史においては、中唐から發展してきた新たな文化が定着し、成熟した時期とされる。宋代の文人たちは、自分自身を衣食住の雅趣に富む人として描き、私人の領域にしても、公的な領域にしても、詩的な生活を營み、生活の審美化を追求している。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　趙蕊蕊　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　大阪大学　教授	浅見洋二
	副 査　大阪大学　教授	湯浅邦弘
	副 査　大阪大学　名誉教授	高橋文治

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：宋代文人の生活と詩―蘇軾を中心として―

学位申請者　趙蕊蕊

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　浅見洋二

副査　大阪大学教授　湯浅邦弘

副査　大阪大学名誉教授　髙橋文治

【論文内容の要旨】

本論文は、蘇軾をはじめとする中国宋代の文人の詩について、彼らの「生活」との関連を中心に考察を加えたものである。全体は大きく第一部「蘇詩と挫折、蘇詩と政治」、第二部「詩歌と美人、詩歌と美食」の二部に分かれ、第一部は五章、第二部は三章と附論一章からなる。

第一部「蘇詩と政治、蘇詩と挫折」は、北宋の蘇軾の詩について、その官僚としての生活と関連づけながら考察を加える。第一章「黄州時代の蘇軾における悲哀表現―「詩成却超然、老涙不成滴」を手がかりに―」では、弾劾を受け左遷されていた黄州時代の蘇軾の詩には、挫折に伴う「悲」とそれを「超然」として乗りこえる「楽」とが複雑に絡み合う形で表現されていたことを明らかにする。

第二章「蘇軾の楽園と『自娯』」は、蘇軾が失意の人生にあって追い求めた「楽園」が現実の生活のなかに見出される内在的・精神的な存在であり、そこには官僚生活のなかで練りあげられていった積極的・主体的な「自娯」の精神があらわれていることなどを明らかにする。

第三章「蘇軾の『卜居』詩について」では、中央と地方を転々とする官僚生活を送った蘇軾にとって「卜居」が政治的な軋轢を回避するための手段という性格を有していたこと、また故郷に帰れぬ「無家」の存在であるという客寓意識と結びついていたことなどを明らかにする。そのうえで後年、嶺南へと左遷された時期の「卜居」について、現実の場所を超えた精神世界のなかに自らの帰り行くべき場所を求めるようになることを指摘する。

第四章「蘇軾詩の『微物』描写における自我像」では、蘇軾の詩における「微物」の描写とそこに託された蘇軾の自我像について杜甫との比較も交えながら分析を加え、蘇軾にとって「微物」が官僚士大夫の「内在的な精神」の追求という点において重要な意味を有していることなどを明らかにする。

第五章「嶺南時期における蘇軾の『勧農』詩」は、嶺南左遷期における蘇軾の「勧農」活動について陶淵明などとの比較を通して考察を加え、官僚の権限を剥奪されていた嶺南期の蘇軾にとっては「躬耕」が「勧農」の代替行為として認識されていたこと、嶺南地域が「江湖」と故郷のイメージを兼ね備えた安寧の地として認識されていたことなどを明らかにする。

第二部「詩歌と美人、詩歌と美食」は対象を蘇軾以外の文人に拡大して、より私的な性格の強い日常生活・趣味生活との関連から文人の文学（詩歌）批評、特に「美人」と「食」の比喩を用いた批評を論じる。第一章「宋代の文学批評における『美人の比喩』」は、「美人」のイメージを比喩として用いた文学批評が、宋代における「文

質」論や「平淡」「自然」「天真」などの諸概念をめぐる議論と密接に結びついていたことを明らかにする。

第二章「文人の食生活と文学批評―中唐から宋代へ―」および第三章「宋代における『以食喩詩』について―蘇軾を中心に―」は、人の日常生活を構成する最も重要な要素である「食」のイメージを比喩として用いた文学批評、すなわち「以食喩詩」が生み出され深められてゆくプロセスを、蘇軾をはじめとする宋代文人の食生活・食文化と関連づけながら明らかにする。また、こうした動きの背後には、親しい文人同士の座談の場での諧謔的な批評のやり取りがあったこと、またそこには「雅俗の融合」、大きく言えば世俗的な庶民文化の成熟とも呼ぶべき現象が見られるようになっていたことなどを指摘する。

附論「柏木如亭と中国の詩学―『詩本草』を中心に―」は、「以食喩詩」をはじめとする中国の詩歌批評の日本における受容の一端を明らかにする。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、宋代文人の詩について「生活」との関連から考察を加えるものである。その問題設定や研究方法に特に目新しい点が見られるわけではないが、多くの文学作品を精緻に読み解いてゆく姿勢は愚直なまでに真摯であり極めて好ましく感じられる。また「論文内容の要旨」に述べたような、従来の研究には十分に明らかにされていなかった点を少なからず明らかにしており、その成果は高く評価できる。

本論文が主たる対象として取りあげる文人は北宋の蘇軾であるが、しかしそれだけに限定されない。必要に応じて北宋の欧陽脩・梅堯臣・黄庭堅、南宋の陸游・楊万里、更には六朝・唐代の文人を数多く取りあげることにより、本論文の考察は幅広いものとなり、説得力を増している。

第一部は、蘇軾という文人について、「悲」と「楽」、「自娯」、「卜居」、「微物」、「勧農」、いずれも従来は散発的に触れられるだけであった主題を設定して多角的な考察を加えることにより、蘇軾の文学の特質を浮き彫りにすることに成功している。特に、嶺南左遷期における蘇軾の精神世界については、多くの独創的な指摘がなされており、従来の蘇軾論を確実に一歩深めたことは間違いない。また、第一部では蘇軾の文学を陶淵明、杜甫、白居易といった六朝・唐を代表する文人と比較する形で分析しているが、それらの比較についても本論文の分析はおおむね妥当なものとなっており、これによって蘇軾の文学史上の位置づけはより鮮明なものとなった。

第二部は、「食」という日常的な生活との関連において、中国の文学論・文学批評の変容を考察するという点で、極めて魅力的な試みとなっている。文学作品を材料にして食生活・食文化を考察する研究はこれまでにもあったが、本論文は「食」という「俗」なる文化が「文」という「雅」なる文化に如何なる変容をもたらしたかという問題意識に立つ点で、独創的な研究たり得ている。唐から宋へと至る時代は、いわゆる貴族文化が解体してゆく時代として捉えられているが、そのような時代の大きなうねりに迫ろうとする試みとして高く評価できる。

以上のように本論文は優れた面を多く有しているが、しかし一方で不十分な点、更に修正を要する点も少なくない。まず、本論文を構成する各章間の関連づけが十分になされていない。第一部について言えば、同じく蘇軾の嶺南時期の持つ意味について論じた箇所が複数の章にまたがって出てくるが、現状ではそれらを結びつけるような論述はなされていない。それらを更に別の視点から結びつけて論じるような試みがなされてしかるべきである。また、第二部は、蘇軾以外の文人に広く手を広げすぎたためか、蘇軾という核を失って、やや散漫に失した嫌いがある。論述の仕方も、ただ資料を羅列するだけであり、立体感に欠ける憾みがのこる。このほか、個々の作品に関する分析に舌足らずのところが少なくなく、資料の誤読や日本語の表現上の不備も散見される。とはいえ、これらの欠点は本論文の価値を大きく損うものではない。よって、ここに本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものであると認定する。